

本居宣長『おもひ草』の研究

田 中 康 二

〔要旨〕 本居宣長は知る人ぞ知る愛煙家である。医者になるための修行で京都に留学した二十代から晩年に至るまで、煙草を欠かしたことはなかった。学者としての宣長は、煙草を喫むだけでなく、煙草に関する知識を漢籍などから吸収し、それを手控えとして書き留めている。また、二十四歳の時、煙草に対する限らない愛着をこめて『おもひ草』（別名、尾花が本）という随筆にしたためた。

本稿は『おもひ草』について、その残存伝本を調査し、本文批評・本文校訂を経た上で、注釈を付すことを目的とする。まず、諸本調査の結果、原則として写本は「尾花が本」、版本は「おもひ草」と称するということが判明した。次に、版本よりも写本の方が原本の面影を伝えており、皇學館大学附属図書館五葉蔭文庫蔵『尾花が本』を底本とするのが適切であるという結論を得た。第三として、注釈作業の結果、宣長が純正和文による文章表現の技術を二十代の早い時期にはほぼ完璧に獲得し、その能力を自在に發揮してさまざまな種類の文章を綴っていたことが判明した。風景描写や心情描写などの際には、古今和歌集や源氏物語といった古典文学作品が典拠とされて、流麗な王朝物語語文学の擬古文体で描かれ

る一方で、煙草そのものを描写する際には、近世の俗文体を用いて描かれた。とりわけ、この時に用いられた俗文体は、後に宣長が議論や記事を記す際に用いられたものであり、汎用性の高い俗文体を獲得したことは、宣長が国学者として活動する上で重要な契機であつたと推定される。

〈キーワード〉 本居宣長・『おもひ草』（尾花が本）・本文研究・本文注釈・皇學館大学附属図書館五葉蔭文庫蔵本

一、愛煙家としての本居宣長

国学者本居宣長が愛煙家であつたことは知る人ぞ知る事実である。よく引用されるところであるが、門弟で熊本藩士の長瀬真幸による証言に触れるところから始めよう（注¹）。

或年、長瀬真幸松阪ヲ辞シテ郷里熊本ニ帰ル。一日予ヲ訪ヒ、談遊学中ノコトニ及ブ。曰ク、宣長喫煙ヲ嗜ムコト甚シク、談笑ノ裡、常ニ烟管ヲ放タズ。タメニ室内濛々トシテ白烟滿チ、コトニ粗葉ナレバニヤ、臭気甚シク、座ニ堪ヘズト。烟草ハモト本邦ノ産ニアラズ。然ルヲ、国学者ニシテコレヲ嗜ムハ、其ノ意ヲ得ザル所ナリ。

弟子と談笑する時にも煙管を手放さず、書齋鈴屋に白煙が充満して大変だったという話である。これは上田一道の手記より紹介された話であるが、その最後には国学者宣長が舶来のタバコを好むことに言及し、皮肉な視線を送っている。むしろ、この結びは批判といったものではなく、単純に話のオチと考えるのが穏当であろう。ともあれ、愛煙家としての宣

長のプロフィールを伝える逸話である。

宣長がいつからタバコを嗜むようになったのか詳らかにしないが、『おもひ草』を執筆した二十四歳の頃には愛煙家の風格があると言つてよい。『おもひ草』では、喫煙にまつわるさまざまなエピソードを紹介しているが、それらは書物からの知識や単なるまた聞きとして片付けるには生々しいリアリティがある。たとえば、外出先でタバコ入れを置き忘れて、それを童が届けてくれたという話(十)を記しているが、そのようなことは経験談としてしか語り得ないことであろう。奇妙なことに、『おもひ草』成立から三年の後、宝暦六年三月二十九日の「在京日記」に次のような記述がある(注2)。

廿九日、この月は小にて、一日はやく春もくれ侍る。過し比、祇園のあたりにて、たばこ入をおとし侍るが、いづこにてうしなひもしらねば、たづぬべきやうもなし。其まゝにて過ぬる、けふふしぎに、孟明のもとより、道にてひろひ侍るとてかへしをくられし。これほど世にかはりし事はなし。あまりのふしぎさに、ふと思ひよりて、返事にかきつけてやり侍るは

つれなくて春はくれ行けふしもあれうれしくかへるたばこいれかな

三年前に記した出来事が、まるでデジャヴのように繰り返された。紛失したタバコ入れが思いも掛けず見つかり、宣長の許に返ってきたのである。孟明とは山田孟明で、在京中に宣長の遊び仲間だった人物である。一緒に行動することが多かったから、行動パターンがよく似た孟明が拾得したことも理解できなくはないが、宣長が言うように不思議といえ、これほど不思議なことはない。おもわず一首詠んだ歌は、春は暮れ行くのにタバコ入れは返ってきたという俳諧歌である。日記のはじめに記しているように、この日は暦の上で一日早い春の終日であったという。よくできた話である。なお、頭脳明晰にして、古典文学の読解については周到に準備と整理が行き届いた宣長であるが、日常生活においては案外このような迂闊なところが少なくなかったのかもしれない。門弟に慕われた宣長の面目はこのようなところからうかがう

ことのできるのである。

宣長は四十三歳の年、明和九年（一七七二）晩春に仲間とともに吉野方面に旅に出掛けた。古事記研究のための実地踏査（フィールドワーク）という意味合いもあったと言われるが、自らの出生の秘密に関わる水分神社への参詣のための旅でもあった。父母が水分神社に願を立てて宣長が誕生したという逸話がある。その旅の途上、吉水院に立ち寄って一服するのである（『萱笠日記』三月八日条）。

此寺の内に、さゞやかなる屋の、まへうちはれて、見わたしのけしきいとよきがあるに、たち入て、煙ふきつゝ、見いだせば、子守^{コモリ}の御社の山、むかひに高く見やられて、其山にも、かたへの谷^やなどにも、ひまなく見ゆる桜共の、今は青葉がちなるぞ、かへすくくちをしき。

吉水院は後醍醐帝がしばらくいらしたところであり、そこから自らの誕生を招来した水分神社を眺めやる場面で、「煙ふきつゝ、」見渡したというのである。現代の感覚で過去を裁断する過誤を犯してはならないが、あまりにも牧歌的な風景というほかはない。それほどまでにタバコは宣長にとって日常生活の一部だったのであり、肌身離さず連れ歩く相棒だったのであろう。

もちろん、宣長は生粋の学者なので、タバコを学問的に追究することに余念がない。とりわけ、自分の嗜好する物について、旺盛な好奇心と探究心が遺憾なく発揮された。京都遊学中（宝暦六年冬）に書き始められたとされる『本居宣長随筆』第五巻には、「烟艸 タバコ」と題して、次のような抜き書きが書き留められている。

○本艸洞詮曰、烟草一名相思草、言人食之則時々思想不能離也ト云ヘリ。四五十年先二朝鮮人ノ撰スル芝峯類記ト云モノニ曰、淡婆姑、草名、亦号南靈草、近歲始出倭国云々、或伝、南蛮国有女人淡婆姑者、患痰疾、積年服此中、得瘳、故名ト。此書朝鮮ニテ何人ノ作ト云事ヲシラズ。又清人陳湔子ガ花鏡一套東来シ、金絲烟、擔不帰等ノ名サマ

くアリ。擔不婦モタバコノ唐音トミヘタリ。李白ガ詩ニ、相思如烟草、歷乱無冬春トイヘリ。相思草ト名ルハコレヨリ出ルニヤ。又偶符合スルカ。李ガ詩ハ本ヨリ烟ト草トノ事也。【摘文】

タバコの名義に関する蘊蓄を漢籍から引用することにより得ているわけである。言及される漢籍は四点、「本草洞詮」・「芝峯類記」・「花鏡」・「李白詩（送韓準、裴政、孔巢父還山）」である。まず、「本草洞詮」は、清の沈穆による著作で、順治辛丑（一六四九）の自序がある。当該箇所は卷九にある。次に、「芝峯類記」は、一般には「芝峯類説」と称される百科事典である。著者の李晬光（一五六三—一六二八）は李氏朝鮮中期の文臣、実学者である。当該箇所は卷十九にある。なお、後述する典拠では「芝峯類説」となっている。第三に、「花鏡」は「秘伝花鏡」六卷のことで、和刻本も製作された。最後の「李白詩（送韓準、裴政、孔巢父還山）」は、『全唐詩』卷一七五—一二に収録される五言古詩の一部で、二十四句からなる古詩の末尾の一对である。「如」を「若」に作る本文もあるが、意味に違いはない。煙草を「相思草」（おもひ草）と称するのは、この詩句を典拠とするとしている。

このように煙草に関する蘊蓄を引用している。ただし、これらの文章は原典から直接引用されたものではない。宣長自身が記しているように、これは伊藤東涯『秉燭譚』卷四より摘記されたものである^{〔注3〕}。『秉燭譚』は享保十四年（一七二九）序であるが、奥付は「宝暦癸未七月新刻 京兆 文泉堂発行」となっており、宝暦十三年（一七六三）の刊行であることがわかる。宣長がこの知識を得たのが写本によるものか、それとも版本によるものかで時期が相違する。『本居宣長随筆』第五卷「群書摘抄」において、『秉燭譚』の直前の書物が『武経七書』であり、この書は宝暦六年十一月頃に摘記されたことがわかっている^{〔注4〕}。『武経七書』を摘記した直後に写本『秉燭譚』を入手して記したとするのが順当であろう。『秉燭譚』の後には物茂卿『徂徠集』や太宰春台『独語』から写していることも、そのことを裏付けける。漢学者の随筆集を集中的に読んだのは京に滞在中のことと推定されるからである。したがって、宣長は京都留学中に写本『秉燭

譚』を入手し、烟草に関する項目を摘記したと考えることができる。

以上のように、宣長は『おもひ草』を執筆してからも、煙草に関する知見をコンスタントに得ていたことがわかる。

二、『おもひ草』の成立と諸本

宣長が『おもひ草』を執筆したのは、写本の奥書に従えば、宝暦三年（一七五三）八月であることがわかる。当年二十四歳の宣長は、京都留学二年目の秋を迎えていた。九月には名を「健蔵」と改める。漢学の師堀景山に入門して一年半、いまだ医学修行にまでは至っていない時期である。だが、漢学とともに和歌・国学を景山から授けられ、独学で日本古典文学の扉を開くことになる。その間の日本古典への習熟度は、『おもひ草』の表現からうかがうことができる。

『おもひ草』の諸本は残存伝本により、大きく写本系と版本系の二系統に分類することができる。写本系は「尾花が本」の名を冠するものが多いが、「おもひ草」と題する写本もある。版本は内題「おもひくさ」により「おもひ草」と称する。

まずは、写本系から見て行くことにしたい。筑摩書房版『本居宣長全集』第十八卷（昭和四十八年）が底本としたのは、本居大平旧蔵写本『尾花がもと』であり、東京大学本居文庫に現蔵されている。題簽に「鈴屋詩文稿 尾花がもと合」とあり、墨付十三丁、片面十二行の本である。巻首には「此本ハ男左衛次カ筆跡ニテ、今ニテハコトニ珍重ノモノ也。御一覽或ハ御写しニても相済候ハハ、ほとなく御かへし可被下候、大平」とあり、末尾に「文化七年庚午年五月 清島写」の識語がある。また、本居宣長記念館蔵の写本は、墨付十四丁、片面九行で記され、裏表紙見返しに「この尾花が本著し給へるは宝暦三年癸酉中秋にして、翁廿四歳の御歳なり、このとし健蔵と改め給へり」と記された付箋が貼られ、

さらにそこには本居清造が朱書で「コノ付箋ハ本居内遠ノ高弟堀内千稲ノ筆ナリ、思フニ此ノ書ハ同氏ノ旧藏ナルベシ、（花押）」と付箋を貼付している。

本居宣長記念館蔵本が堀内千稲旧藏にかかることを鑑み、皇學館大学附属図書館五葉蔭文庫を調査したところ、案の定、『尾花が本』（題名は外題による、内題なし）が所蔵されていることが明らかになった。墨付十三丁、片面十二行の写本である。巻末には本居宣長記念館蔵本と同じく、宣長の年齢と改名の件が付箋に朱書されている。したがって、本居宣長記念館蔵本の祖本に当たる可能性が高いことが推察される。しかも、五葉蔭文庫本には「乙未仲春 長谷川常雄」なる書写奥書が存在するのである。語釈にも記すように、同年（安永四年）は常雄が十九歳の年である。すでに十六歳の年には『菅笠日記』の旅に同行し、後に宣長から「格別出精厚志」（寛政五年）と期待されることになるわけであるから、早い時期に宣長の習作を借り出し、写本を造っていたとしても不思議ではない。これがいかなる経緯からか堀内家に渡り、再写されて本居家（清造）のもとに戻ってきた経緯を勘案すれば、奇縁というべきかもしれない。

奇縁といえ、もう一つ本書の写本が本居宣長記念館に現蔵されていることに言及しておく必要がある。やはり「尾花が本」の名を外題に有する一本であるが、子細に検討すれば、この本は墨付十三丁、片面十二行という書写の大枠は言うに及ばず、仮名字母から文字配りに至るまで、五葉蔭文庫蔵本にきわめて近い性格を有する本であることがわかる。時に「折」の仮名について、五葉蔭文庫本は「をり」とするのに対して、本居宣長記念館本は「おり」とするなど、仮名遣いに関する相異点があくたまに見られるが、その点を別にすれば、模本である可能性が高い。しかも、本居宣長記念館本が祖本で、五葉蔭文庫本が子本であると推定される。宣長と宣長門弟長谷川常雄系の本、ならびに宣長の孫内遠の門弟が堀内千稲であるという点において、現所蔵はきわめて順当な関係ということになるだろう。ところが、この本居宣長記念館本はもともと岩田隆氏の旧蔵にかかり、氏の『本居宣長の生涯』（以文社、平成十一年二月）刊行の記念として同館に寄

贈された一本であるという（末尾に挿まれた付箋の記述に拠る）。岩田隆氏が当該本を入手された経緯は詳らかにしないが、宣長没後二百年（平成十三年）を前に、収まるべきところに収まったと言ってよからう。奇遇と言ってよい。

先に岩田隆氏旧蔵本を祖本、五葉蔭文庫本を子本としたが、宣長と長谷川常雄（当時は中里常雄）との関係を鑑みれば、常雄が宣長の著作に関して一文字も忽せにするまいとする書写態度等からも矛盾しないと考えられることができる。とすれば、必然的に岩田隆氏旧蔵本は宣長自筆本の可能性が高いということになる。実際、本居宣長記念館では自筆本として取り扱われている由である。なお、自筆本の認定に関しては、筆跡鑑定やさらなる書誌調査、本文調査ならびに伝来等に関する総合的研究を経た上で結論づけられるべきものと考ええる。なお、大久保正氏によれば、「本書の自筆稿本は「おもひぐさ」と題し、本居家に伝えられたという記録はあるが、現在その所在が明らかでない」（『本居宣長全集』第十八巻「解題」）由である。

本稿では書写年次が明らかで、かつもつとも古い五葉蔭文庫本を底本とすることとした。なお、前掲のほか、写本として伝わるもので、実見できた（複写を含む）ものに次の本がある。

- （一）天理大学附属天理図書館蔵「をはなかもと」（佐佐木信綱写）
- （二）大阪府立中之島図書館石崎文庫蔵「尾花がもと」（浅井清長写）
- （三）茨城大学図書館菅文庫蔵「をはなかもと」（文化九年十二月三日伊能千俣写）
- （四）刈谷図書館蔵「をはなかもと」
- （五）刈谷図書館蔵「をはなかもと」
- （六）西尾市岩瀬文庫蔵「おもひぐさ」（版本の臨写本、文政六年夏写）
- （七）京都大学文学部国文学研究室蔵「おもひぐさ」（文政十二年十二月五日長瀬真幸写）

(九) 京都府立総合資料館蔵「おもひくさ」

乎波那賀毛登廼波之布美

アヤシキモ座神可母奇久毛座神可母真草生野椎神乃御魂幸波比根乃山曾岐野乃衣子木登チクサノカヤチクサノカハタチ産生給開流麻
 靈久毛座神可母奇久毛座神可母真草生野椎神乃御魂幸波比根乃山曾岐野乃衣子木登チクサノカヤチクサノカハタチ産生給開流麻
 ニマニヲサササトホコトニナクキクサヘハサカゼニチヘナミツウツナミシギテオホキニゾマキエクルソノカナタバコ云クサノミヅハ
 爾麻爾重訊遠異国在奇草左朝風爾千重浪立夕風爾五十重浪立奧浪刃浪志努岐皇國爾釵參采其中爾煙草草乃瑞葉
 弥栄爾榮而此草乃不生出土不入立地乃アラ邪流金絲網那母桑玉乃ヒシラメ流ム從母ヒサカリヨノ深更加較理立タマザイイカモ無加流倭校蕪風
 ハモマビコノサカヘムハミタクノサタルキミフツニチメリコトニイセヒモトリノリガオモサオモワスレズバナガモトノヒクサフツヘテ郡理ソコトノハノ
 波母山彦乃將応極谷港ノ狭渡極悉爾充滿理於是伊勢人本居宣長思草思比忘礼受伝乎波那賀毛登乃一種植添号郡理ソコトノハノ
 ニホヒヤ益爾薰札々婆是遠之毛アオ思ヒオモ邪留倍岐サカレモコトニ草植添之從母歲波二十餘年乎經爾多礼波旧之詞草乃種奈良邪流醜乃
 コトクサオソヘテミミヲガデナリオンレトツクサアラタマツキニヒネレユキベキウレハシ美豆アカカラアシニクサリウツノユフベニツカヒテジクシケケコトノサノ
 異草生添而頼見別賀氏那理己旧章乃荒玉乃月爾日爾枯往笈幾手憂波之美豆朱引旦爾耘夕星乃夕爾培氏繁久思氣支クサコトノサノ
 ア化草搔払比多礼婆清久之久曾那礼裡格流山下風乃甚寒氣久鍾礼雨乃弥敷爾零許登乃葉末之乱相脍伎可母故擊壤而歌比氣良久
 ヒトミナノトリテシヌバセオヒサツウノタマスコトノハソコレ
 人皆之執而偃婆世思草露珠貫言葉叙許礼

本居宣長『おもひ草』の研究（田中）

体をはじめとする古代文体に関心があつたとは思えないので、少し違和感があるけれども、この文体を採用したところに序者の思いを知ることができる。『古事記伝』をはじめとする上代文学研究者としての宣長へのオマージュであろう。そうであるとすれば、序文中の「此ノ草植エ添ヘシ従モ歳ハ二十余年ヲ経ニタレバ」という言説も別の解釈の可能性が浮上する。「此ノ草植エ添ヘシ」は、本書が執筆された宝暦三年を指すと考えることもできるが、そこから「二十余年」経過しても、まだ安永年間であり、古代文学研究者としての本領はあまり知られていない。とすれば、その始発を『古事記伝』初帙五冊が刊行された寛政二年（一七九〇）あたりを上限とするのが妥当ではないだろうか。または、版本の臨写本の書写奥書の上限が文政六年（一八二三）であることを斟酌すれば、宣長の没年（享和元年（一八〇一））というのも設定可能であろう。少し苦しい解釈ではあるが、本書が宣長没後に刊行されたとする通説と、序文が宣命体で記されているという事実を勘案すれば、そのあたりに落ち着くことになるのではなからうか。

この版本『おもひ草』は近世後期に一定程度、流布したと想定される。そして、近代以降は版本を底本として、以下の叢書に収録されて広く読まれるようになった。

- (1) 『百家説林』巻三（明治二十六年、吉川半七）・正編上
- (2) 『本居宣長全集』巻五（明治三十五年十月、吉川半七、片野東四郎）・増補版巻九
- (3) 『随筆日記抄』下巻（大正十二年十二月、裳華房）、鴻巣盛広による略注あり。
- (4) 『日本随筆大成』巻六（昭和二年九月、吉川弘文館）
- (5) 『たばこ古文献第二集』（昭和四十二年三月、日本専売公社）、清水国光による口語訳あり。

とりわけ早い時期に『百家説林』に収録されたために、宣長の愛煙家としての側面が知られるようになった。その後、宣長のタバコ好きが広く知られるようになり、大蔵省専売局による日本最初の口付タバコが発売された折（明治三十七年

七月一日)、數島・大和・朝日・山桜の四種が選ばれたが、その命名は次の宣長の歌に拠っている。

數島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花

この歌は宣長が還暦の年(寛政二年)の秋に自画像に添えた賛として詠まれた歌である^{注5)}。この四種の銘柄によって、宣長の歌は広く知られるようになったが、その一方で宣長のタバコ愛好もまた知られるようになったのである。

三、『おもひ草』の文体的特徴

『おもひ草』は宣長の嗜好品に対する偏愛と、それを雅俗の事柄を縦横に書き分ける表現力により、近代に入ってから隨筆集等に収められ、一定の読者を獲得したものと思われる。当該書の評価として、たとえば、大久保正は『本居宣長全集』の解題にて、次のようにその特徴を指摘しているものが標準的なものであろう。

本書は、宣長が煙草と喫煙にまつわる四季折々の情景や趣味を、平安朝好みの美しい雅文で書き綴ったものであるが、その煙草好きと共に、当時二十四歳の宣長が、その嗜む煙草に寄せてかかる雅文の創作を試みるまでに、平安朝の文章のスタイルを自家薬籠中のものとなし得ていたことは、宝暦十三年(一七六三)、三十四歳の頃の作とされる『手枕』等の文章の先駆をなすものとして注目に値する。

二十四歳の習作であること、平安朝の雅文体で綴ったものであること、雅文小説『手枕』に先行することなどである。たとえば、次の文を見てみよう。

ふみ分てこし跡だになき、庭の萩はら、ことゝふものは風のみにて、いとゞ、身にしみつゝ、色みえぬ人の心は、木の葉と共にうつろひゆく、秋の夕暮、いまさら、まつとはなき物から、うちしをれたる浅茅が末の、露のそこより、

心ほそう鳴い^キでたるまつ虫も、誰をかと思へば、人わろくなみだのこぼるゝも、つゝましくて、まぎるゝかたもやと、手ずさみのやうに、かいつぐ手つき、いとなよゝかにて、打みじろくさまも、らうたしや。

この長い一文の中には、次のような和歌が踏まえられ、あるいは想起しつつ読むことを期待して記されている。

（一）形見とてほの踏み分けし跡もなし来しは昔の庭の萩原（新古今集・恋四・一二八九・藤原保季）

（二）ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりほかにとふ人もなし（古今集・秋上・二〇五・読人不知）

（三）風の音の身にしむばかり聞ゆるはわが身に秋や近くなるらむ（後拾遺集・恋二・七〇八・読人不知）

（四）色みえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける（古今集・恋五・七九七・小野小町）

（五）秋風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかがとぞ思ふ（古今集・恋四・七一一・素性）。

（六）君待つとわが恋ひをればわが宿のすだれ動かし秋の風吹く（万葉集・卷四・四八八・額田王）

（七）跡もなき庭の浅茅に結ばはれ露の底なる松虫の声（新古今集・秋下・四七四・式子内親王）。

（八）もみぢ葉の散りてつもれるわが宿に誰をまつ虫こころ鳴くらむ（古今集・秋上・二〇三・読人不知）。

かくも多くの和歌を背景に置いて解釈することを強いる文体であると言つてよい。逆に言えば、この一文は古典和歌から紡ぎ出された文章表現なのである。これぞまさに雅文学の極致と言つてよからう。このような文章は王朝物語や平安朝和歌の教養を背景にして執筆された和文であつて、同じ知識基盤を有する者の間で共有された文体ということが出来る。

国学を修め、和歌を詠み、時には和文を綴ることを好む国学者の間で流通する文章である（注6）。

こういった和文を『おもひ草』の特徴とし、そこから宣長の国学者歌人としての实力を見るのは有意義な観点と言えよう。古代文化を説明することを生涯の志としつつも、源氏物語をはじめとする王朝文学の世界に終生、沈潜した宣長にとって、平安朝和文を用いて作文することは理想の実現への近道でもあつたからである（注7）。このような王朝物語的教養

は確実に宣長の学問的性質を雄弁に物語っていると云ってよからう。むろん、それはおおむね妥当な評価であると思われるけれども、子細に検討すれば少し修正が必要と思われる箇所もないわけではない。それは当該隨筆が「平安朝好みの美しい雅文」（大久保正）一辺倒ではないということである。たとえば、次の文を見てみよう。

かりそめに物したるまらうども、すべてとりあへず、まづいだすものなるを、すかぬは、やうなしとてかへしたる、はへなき物なり。

文意は次の通り。ついちよつとやつて来た客人にも、総じてタバコはまず最初に供するものであるけれども、タバコが嫌いな人は要らないと言つて突き返してしまうのは、見栄えが悪いものだ、といったところだろう。この文のどこが問題なのか。これは古典語の語彙を用い、正確に古典文法を操りつつ綴った作文ではあるが、いわゆる古典文学のテキストからの引用がまったくないということである。特定の作品を連想させるフレーズもなければ、下敷きにした作品のシーンもない。なぜかといえば、この場面自体が俗だからである。つまり、近世における日常を古典の語彙と文法で表現した文章なのである。そのようなシチュエーションはかつて古典文学に表現されたことがなかった。踏まえるべき古典文学作品が見当たらないのである。

いま並べた両者の文体を比較すれば、問題の所在は明らかであろう。平安朝の語彙と文法を駆使し、主に平安朝の古典文学を踏まえて綴られた雅文学もさることながら、俗の場面や議論をも雅文体で表現することを達成したところに、『おもひ草』の文体実験の意味があつたと思われるのである。すなわち、あらゆる事象を古典語と古典文法で表現することが可能であるということを証明したわけである。このことは和文によつて表現する文体が誕生したことを意味する。諸先達が指摘するように、『おもひ草』が『手枕』の先蹤であるとする面ももちろんある。賀茂真淵から薫陶を受けたように、古代文学を理解するためには、古代語で作文する技能を身につけなければ本物とはいえない。そのためには、古代文学を

模倣することから始める必要がある。『手枕』は源氏物語をより深く理解するための試みであった。しかし、それだけではない。古代にはなかった事柄を古代語で表現することも、国学にとつて重要な役割だったのである。そういった意味で、後に宣長が行う注釈、俗をも写す随筆、議論を事とする論述など、あらゆる文体の可能性がここに拓かれたということが、『おもひ草』の意義であると考えられる。

四、『おもひ草』本文と注釈

凡例

- 一、底本に皇學館大学附属図書館五葉蔭文庫蔵「尾花が本」（G九一四／一六四／4B右一九―二）を使用した。
- 二、朱書人は墨字同様に処理した。
- 三、仮名の清濁は原本のままとし、漢字の濁点は省略に従った。また、原本には読点（、）のみ付されているが、便宜上句読点の区別をした。
- 四、歌記号以外の庵点（へ）は段落として分割し、各段落には適宜、標題を付した。
- 五、語釈は文意を取ることを趣旨とし、参照すべき典拠を掲出した。

（一）〈タバコ〉の由緒来歴

思ひ草は、秋の野の、尾花がもとに、おふるとかや。またはこのけふりも、其名にたぐふ心地して、室のやしまもとをからず、とことはにこがれつゝ、人の口のはにのみぞかゝる。さるは、いひけたれても、なほふかくおもひいれて、もゆ

るけしきは、いぶきの山のさしも草にもことならず。かくのみたえずなげさせる。はては、いぶせくきたなげになりて、すてらるゝよ。いとかく、あだなる物とは思へど、とあることには、なほ世にしらざおかしき物にこそあなれ。かゝるも、むげにちかき世の事ぞかし。むかしはおさく名をだにしらざりしものゝ、やむことなきあたりまで、もてはやさるゝも、いかなるわざにや。人の国にも、いにしへは、かゝる物、ありとも聞えず。此比渡りまうでくる書どもにこそ、こゝにもつゆたがはで、もてあそぶよし見えたとぞ。はるかなるせかいより、此国にめづらしき物ども、あまたわたしもてくる人を、まれく見るには、なほまさりて、あながちにこのめるさまなり。

【語釈】

○思ひ草—ナンバンギセルの異名。ハマウツボ科の一年草で、ススキなどの根に寄生し、秋、煙管に似た筒状の淡い赤紫色の花を付ける。○思ひ草は、秋の野の、尾花がもとに、おふるとかや—「思ひ草」は秋の野の尾花の下に生えるとかいうことだ。「道のべの尾花が下の思ひ草今さらさらに何か思はむ」（万葉集・卷十・二二七〇・作者未詳）、「秋の野の尾花にまじり咲く花の色にや恋ひむ逢ふよしをなみ」（古今集・恋一・四九七・読人不知）。○またはこのけふり—「たばこ」を編み入れる。○其名にたぐふ心ちして—「思ひ草」という名前にふさわしい気がして。○室のやし—下野国の歌枕。古来、煙が立つ場所として有名。「下野や室の八島に立つ煙思ひありとも今こそは知れ」（古今六帖・第三・一九一〇）。○こがれつ、—恋い焦がれる意に、タバコの火に焦げる意を響かせる。○人の口のはにのみぞかゝる—人の噂の種になるの意に、タバコが人の口に入る意を掛ける。「のみ」は強意の副助詞であるが、「喫み」を響かせる。○いひけたれても—悪口を言われてもの意に、「火消たれて」を編み込む。○おもひいれて—思い入れを持つての意に、「火入れて」を編み込む。○もゆるけしきは、いぶきの山の—「灰吹き」を編み込む。灰吹きとは、タバコの吸い殻を吹き落とすための竹筒。ただし、歴史的仮名遣いは「はひぶき」。○いぶきの山のさしも草—伊吹山は近江国・美濃国の歌枕。古来、薬草の産地

として名高く、艾（もぐさ）が有名。「かくとだにえやは伊吹のさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」（後拾遺集・恋一・六一二・藤原実方、百人一首）。○なげきせる―嘆き悲しむ意に、「煙管」を編み込む。○いぶせく―嫌われる。○あだなる物―はかない物。タバコが消え物であることを意味する。○やむごとなきあたり―高貴な身分の方々。○人の国―外国。○此比渡りまうでくる書ども―近年渡来した異国の書物。詳細未詳。○はるかなるせかい―遠い異国。○あながちにこのめるさま―一途にタバコに愛着する様子。

（二）〈春の景色と喫煙〉

鶯の、谷より出し初声（ハツコエ）より、世はをしなへて、春めきつゝ、やうく風なつかしう吹わたして、おほかたの花の木ども、けしきばみ、梅は今をさかりにて、にほひにかすむ大空の、のどけさに、そこはかとなく、あくがれいづる、春のひかり、かしらの雪もきえぬべく、おひたるも、わかきも、をのがじ、きよらをつくし、とがむばかりの香（か）にしみたる、くれなるの袖ふりはへて、行（き）かふ人を、まちまうけたる、かりのゆかなどに、しばしやすらひつゝ、まづとうで、火もてこといひたるに、きよげなる女の、あはくしげにもいでて、なめげにさしおきたる、さるがふことなどいひあざれたる、いとおかし。

【語釈】

○鶯の、谷より出し初声―鶯が谷から出て発するはじめての鳴き声。「鶯の谷より出づる声なくは春来ることを誰か知らまし」（古今集・春上・一四・大江千里）。○けしきばみ―花が咲く兆しが見えて。「梅はけしきばみほほ笑みわたれる、とりわきて見ゆ」（源氏物語・末摘花）。○梅は今をさかりにて、にほひにかすむ大空―梅は今を盛りと咲いて、その匂いで霞む大空。「大空は梅のにほひに霞みつつ曇りもはてぬ春の夜の月」（新古今集・春上・四〇・藤原定家）。○あくがれ

いづる―気持ち^{キモチ}が浮き立って。「物思へば沢の螢も我が身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る」(後拾遺集・雜六・一一六四・和泉式部)。○春のひかり、かしらの雪もきえ果てぬべく―春の日の光を浴びて、白髪(頭の雪)も消えてしまうかと思われて。「春の日の光にあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき」(古今集・春上・八・文屋康秀)。○をのがじ、きよらをつくし―各自思い思いに小綺麗に装飾して。「とりわきおほせ言ありて、きよらをつくして仕うまつれり」(源氏物語・桐壺)。○とがむばかりの香にしみたる―氣になるくらいまで香りが染み込んでいる。○くれなるの袖ふりはへて、行かふ人を、まちまうけたる―「袖振る」にわざわざの意の「ふりはへて」を掛ける。「春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ」(古今集・春上・二二・紀貫之)。○かりのゆか―「仮床(さずき)」(日本書紀・神代上)の訓読みで、棧敷の古名。○きよげなる女の、あはくしげにもていで―こざつぱりと綺麗な女が輕薄そうに持つてよこして。「宮仕する人を、あはあはしうわるきことにいひおもひたる男などこそ、いとにくけれ」(枕草子・おひさきなく)。○なめげにさしおきたる―遠慮することなくタバコを置いた。○さるがふことなどいひあざれたる―「さるがふこと」は「猿樂言」で冗談の意。滑稽な冗談を言つてふざけている。

(三)〈明け方の景色とタバコの煙〉

有明の比、ものへまかるとて、夜をこめて立出る。空は月影くまなきに、やうく、東の山ぎはあかりて、しらみゆくほど、なほ行すゑは、霧わたりて、はるかなる野べに、へをりく―にうちてたく火のけふりあらばと、貫之のぬしのいひけむことなどは、思ひ出られて、ゆくくきりいでつゝ、とぶ火のひかりを、野守^{ノモリ}がいほには、あやしと出^デてやみるらむ。かくてまだ思ふさまならぬに、火のきえぬは、をしき物なり。

【語釈】

○有明の比―有明の月が空に掛かる頃。月の下旬。○ものへまかる―あるところへ行く。○夜をこめて―夜が明けないうちに。「夜をこめて鳥の空音ははかるともよに逢坂の関は許さじ」（後拾遺集・雑二・九四〇・清少納言、百人一首）。○やうく、東の山ぎはあかりて、しらみゆく―ようやく東の山際が明るくなつて白んでいく。「春は曙。やうやう白くなりゆく、山ぎは少し明かりて紫だちたる雲の細くたなびきたる」（枕草子・春は曙）。○をりく―うちてたく火のけふりあらば―機会があることに、この火打ち石を打つて煙が立ったならば。「をりをりに打ちてたく火のけふりあらば心さがをしをしのべとぞ思ふ」（後撰集・離別・一三〇四・紀貫之）の upper 句。○貫之―紀貫之。○きりいでつ、―火を熾しては。○とぶ火のひかりを、野守がいほには、あやしと出てやみるらむ―飛火野の烽火を野守は庵の中から奇怪だと思つて、外に出て見るだろうか。「春日野の飛火の野守出でて見よいまいく日ありて若菜摘みてむ」（古今集・春上・一八・読人不知）。○思ふさまならぬに、火のきえぬる―思う存分タバコを味わたたわけではないのに、火が消えてしまう。

（四）〈秋の景色とタバコの煙〉

ふみ分てこし跡だになき、庭の萩はら、こと、ふものは、風のみにて、いとゞ、身にしみつゝ、色みえぬ人の心は、木の葉と共にうつろひゆく、秋の夕暮、いまさら、まつとはなき物から、うちしをれたる浅茅が末の、露のそこより、心ほそう鳴いでたるまつ虫も、誰をかと思へば、人わろくなみだのこぼるゝも、つゝましくて、まぎるゝかたもやと、手ずさみのやうに、かいつぐ手つき、いとなよゝかにて、打みじろくさまも、らうたしや。風にふかれて、よこさまにたちのぼる、煙の行ゑも、つくゞとうち詠められて、あはれ、つらきかたにも、吹つたへてしがな。さらば、人しれぬ、我おもひも、空にしるくや見ゆらんと、思ふも、中々の心のもよほしならめ。

【語釈】

○ふみ分てこし跡だになき、庭の萩原―踏み分けてやって来た足跡さえもない庭の萩原。「形見とてほの踏み分けし跡もなし来しは昔の庭の萩原」(新古今集・恋四・一二八九・藤原保季)。○こと、ふものは、風のみにて―訪れるものは風ばかりで。「ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりほかにとふ人もなし」(古今集・秋上・二〇五・読人不知)。○いとゞ、身にしみつゝ、―普段よりいっそう身にしみつつ。「風の音の身にしむばかり聞ゆるはわが身に秋や近くなるらむ」(後拾遺集・恋二・七〇八・読人不知)。○色みえぬ人の心は、木の葉と共にうつろひゆく―目に見えない人の心は木の葉が散るとのともに移りゆく。「色みえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」(古今集・恋五・七九七・小野小町)。「秋風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかとぞ思ふ」(古今集・恋四・七二四・素性)。○まつとはなき物から―「君待つとわが恋ひをればわが宿のすだれ動かし秋の風吹く」(万葉集・卷四・四八八・額田王)。○うちしをれたる浅茅が末の、露のそこ―しおれた浅茅の末葉に置く露の底。「跡もなき庭の浅茅に結ほはれ露の底なる松虫の声」(新古今集・秋下・四七四・式子内親王)。○心ほそう鳴いでたるまつ虫も、誰をかと思へば―心細く鳴き出した松虫も誰を待っているのかと思うと。「もみぢ葉の散りてつもれるわが宿に誰をまつ虫こら鳴くらむ」(古今集・秋上・二〇三・読人不知)。○人わろくなみだのこぼるゝも、つゝましくて―人に見られてはつが悪く涙があふれ出すのも包み隠したくて。○かいつぐ手つき、いとなよゝかにて、打みじろくさまも、らうたしや―タバコを持つ手つきはたいそうしなやかで、体を動かす様子もかわいらしい。○風にふかれて、よこさまにたちのぼる、煙の行ゑ―風が吹いて横に立ち上っていくタバコの煙の行方。○つらきかたにも、吹つたへてしがな―風が吹いて、私につれない人にも伝えてほしいものだ。○人しれぬ、我おもひも、空にしるくや見ゆらん―人に知られることのないわが心のうちも空にはつきりと見えるのだろうか。「人知れぬ思ひをつねにするがなる富士の山こそわが身なりけれ」(古今集・恋一・五三四・読人不知、伊勢物語)。○中々の心のもよほしならめ―かえってわが心が促しているのであらう。

（五）〈不格好な喫煙者への不快感〉

ふつ、かに、ふとり過たる、げすをのこの、顔にくさげなるが、くつろかにうちあをぎ、ひげ、かいなで、くはへるは、引はなちても、すてまほし。

【語釈】

○ふつ、かに、ふとり過たる、げすをのこ―不格好なまでに太りすぎた下賤の男。○顔にくさげなる―顔がいかにも醜い。「顔にくさげなる人にも立ちまじりて」（徒然草・一段）。○くつろかにうちあをぎ―くつろいだ様子で上を向いて（扇を使つて）。○ひげ、かいなで、くはへゐたる―髯を掻き撫でながらタバコを銜えて座っている。○引はなちても、すてまほし―タバコを取りあげて捨ててしまいたい。

（六）〈来客にタバコを勧める〉

かりそめに物したるまらうどにも、すべてとりあへず、まづいだすものなるを、すかぬは、やうなしとてかへしたる、はへなき物なり。

【語釈】

○かりそめに物したるまらうど―ついちょっとやって来た客人。○まづいだすものなる―タバコはまず最初に供する。○すかぬは、やうなしとてかへしたる―タバコが嫌いな人は要らないと言って突き返してしまう。○はへなき物なり―見栄えが悪いものだ。

(七) 〈喫煙者の禁煙〉

心地れいならず、なやみゐて、はかなきくだ物^{モノ}などをさへ、いとものうくしたる折にも、いささをこたりざまなるには、まづおもひ出るぞかし。つねにすける人の、きよくとほざけて、日数ふるは、とふらひきたる人^{ひと}などにも、しか^どなんさふらふ^ふなどいふかし。

【語釈】

○心地れいならず、なやみゐて―体が普通ではなく病んでいて。「朱雀院の帝、ありし御幸ののち、そのころほひより、例ならず悩みわたらせたまふ」(源氏物語・若菜上)。○いとものうくしたる折にも―ひどく物憂い思いをしている時でも。○いささをこたりざまなるには―少し快方に向かつている時には。「読経・修法などして、いささかおこたりたるやうなれば」(蜻蛉日記・上)。○まづおもひ出る―タバコのことがまず思い出される。○つねにすける人―いつもタバコが好きな人。○きよくとほざけて、日数ふるは―厳格に禁煙をして数日経るのは。○しか^どなんさふらふ^ふなどいふかし―しかしかの事情で禁煙しているなどと言うよ。

(八) 〈晩夏の景色とタバコ〉

水無月^{ハツカアマリ}廿よ日のひるつかた、扇の風も、よにぬるく覚え、夕風まちつくる程も、たへがたくて、のきちかう、うた、ねしたるに、ふと目さめぬれば、かたしけるかたの、あせにしめらひて、いと^ど物むつかしく、あつさ所せきを、めするく、引よせて、火たづぬるも、あながちなりや。今ぞすこし、庭の梢もうちそよぐほど也。

【語釈】

○水無月廿よ日―六月下旬。夏の終わり。○夕風まちつくる程―夕風が吹くのを待ちうける間。○のきちかう、うた、ね

したるに――軒近くの縁側で転た寝をしている時に。○かたしけるかた――独り寝をした肩。「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」（古今集・恋四・六八九・読人不知）。○いとゞ物むつかしく――先ほどよりもいっそう気持ち悪く。○あつさ所せきを――身の置き所がないほど暑いが。「六月にもなりぬ。暑さ所せきにもまづ、去年のこのころは、こともなく御心地よげに遊ばせたまひて」（讃岐典侍日記）。○めする――引きよせて――つい目が煙草を追ひ、これを引き寄せて。○火たづぬるも、あながちなりや――火打ちをさがすのもせつかちであるなあ。○庭の梢もうちそよぐほど――（秋風が吹いて）庭の梢もそよぐ時期。

（九）〈疎遠な人のもとの喫煙〉

あまり、したしくもあらぬ人のもとにて、物がたりし、例のいだしをきたるとかくして時うつり火もしろきはいがちになりたるを、たづぬるに、はやくきえぬる、たゞにさしおくが、くちをしなければ、あるじや心づく、しばしかきさぐりあるを、とく見て、人よびたるはよし。心やすきわたりにては、いかにもせむを。

【語釈】

○物がたり――世間話。○例のいだしをきたる――いつものようにタバコを出しておいた。○あるじや心づく――主人が気づくのではないかと。○心やすきわたりにては、いかにもせむを――気の置けない人のもとでは、どうしてもするのに。

（十）〈冬の景色とタバコ〉

あら――しう吹しをりし嵐も、なごりなくのどまりて、せんざいのこずゑもいとゞさびしく、木の本にくちのこる落葉^{オウ}も、あさ霜ながらの水にうづもれ、空さへ雪げにうちくもりぬる夕ぐれ、やゝちりくる花にぞ、へ春のとなりのちかけれ

ばと、すこしさうくしきも、なぐさみて、ながめいだせるに、ねぐらにかへるゆふがらすの、三つ四つ二つなきわたるも、いとさむげにみゆ。かくしつゝ、はやくれ竹の葉ずゑなどより、やうくしろく成行ほど、さすがにまだ、物のけぢめも見えわきて、やり水のほそうて残りたるなどもおかし。内外、人のけはひもいたうしづまり、つれづれなるよひの程、庭に跡をも、いかゞはいとひあへむ。そも何ばかりの心ざしにてかは、かゝる雪もよに、物する人のあらんと、うむじゐるをりしも、かどのかたに、入くる人のけはひぞする。袖うちらはふほども、心もとなくて、はしちかうたち出つゝ、みれば、あけくれ、になうむつびかはす人の声にて、いかゞ物し給ふ。こよひの雪を、ひとりもてあそばむ事の、かたはなるこゝちし侍りて、なん、などいひたる、うれしくて、いでやこゝにも、心ばかりは、かき分て思ひやり侍りしかど、ならはぬ夜のありきは、ものうくてなん、などいらへつゝ、おくのかたにいりて、いとおほきなる火おけに、すみこちくしうおこし、つとよりゐて、なにくれとむかしいまの物語しつゝ、よひ過る程、いとすぐく、しめくと、心ほそくて、雪をれの音のみ、しばくきこゆるに、ふりつもる程もしられて、こよなうさむけしや。あかずむかひ居たらむ程、れいのけふりは、今さらにいひたてずとも、空にしるべし。夜やうくふけゆけば、かへるよしして、心なき長ゐのうらを、下部などや、海士のすむ里のしるべと、おもひ侍らん、ねぶたうぞおはすらんなどいひつゝ、たつ。なにかは、千夜をよにとと思ひ侍れど、御心とまるべき、くさはひにも侍らねば、しゐて、今しばし共、いかゞは聞えさせむ。ふりはへ、とはせ給ふみ心ざしはさる物にて、雪こそ深く侍るなれ。みちの程もおほづかなし。あかりの御まうけやさふらふ、まいらせてむやなどきこえつゝ、ずさよばすれば、ねふりゐたるが、かほふくらし、あくびうちして、はしりくるもおかし。立いづるほど、おくより、御たばこいれなむ、のこりて侍りしとて、わらはべのもていでたる、こはわすれにけりとして、ふところさしいれて、いぬめり。

【語釈】

本居宣長『おもひ草』の研究（田中）

○あら／＼しう吹しをりし嵐も、なごりなくのどまりて―荒々しく吹いて草木をしおれさせた嵐も跡形もなく静かになつて。○木の本にくちのこる落葉―木の下で朽ち果てることなく残る落葉。○あさ霜ながらの氷にうづもれ―朝降りた霜のままの氷に埋もれて。○空さへ雪げにうちくもりぬる夕ぐれ―空までもが今にも雪が降りそうに曇る夕暮。「空はなほ霞みもやらず風さえて雪げに曇る春の夜の月」（新古今集・春上・二三・藤原良経）。○や、ちりくる花にぞ、へ春のとなりおちかければと―少し散りかかる花に対して、春がすぐ隣まで来ているのだと。「冬ながら春の隣の近ければ中垣よりぞ花は散りける」（古今集・雑体・一〇二一・清原深養父）。○ねぐらにかへるゆふがらすの、三つ四つ二つなきわたる―「鳥の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり」（枕草子・春は曙）。○やり水のほそうて残りたる―庭園には遣水が細い流れながらも残っている。○庭に跡をも、いかゞはいとひあへむ―慈円歌を踏まえて、庭の雪に自分の足跡を付けて、訪問客があつたと擬装するのをどうして嫌がるのかわからない。「庭の雪にわが跡つけて出でつるを訪はれにけりと人や見るらむ」（新古今集・冬・六七九・慈円）。○そも何ばかりの心ざしにてかは、かゝる雪もよに、物する人のあらん―そもそもどういった了簡で、このような雪の降る中にやつて来る人がいるのだろうか。○うむじゐるをりしも―うんざりしていた折も折。○袖うちはらふ―袖に掛かった雪を払う。客人の行為。○はしちかうたち出つ、―廂のそばまで出て立つて。○ならはぬ夜のありき―慣れない夜の外出。○雪をれの音―降り積もった雪の重みで木の枝が折れる音。「明けやらぬ寢覚めの床に聞ゆなり籬の竹の雪の下折れ」（新古今集・冬・六六七・藤原範兼）。○れいのけふりは、今さらにいひたてずとも、空にしるべし―例のタバコの煙は今さら言い出さなくても、それとなくわかるであらう。「唐衣うつ声聞けば月清みまだ寝ぬ人を空に知るかな」（新勅撰集・秋下・三三三・紀貫之）。○長ゐのうら―撰津国の歌枕。ここは長く留まっていること。「霜冴えて夜も長居の浦寒み明けやらずとや千鳥鳴くらむ」（千載集・冬・四二七・法印静賢）。○下部―卑役の雑人。○海士のすむ里のしるべ―小町歌により、「恨みん」の意。「海人の住む里のし

るべにあらなくにうらみんとのみ人の言ふらむ」(古今集・恋四・七二七・小野小町)。○なにかは、千夜を一よに―どうして千夜を一夜にすることができないのか。「秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜し寝ばやあく時のあらむ」(伊勢物語・二十二段)。○しゐて、今しばし共、いかゞは聞えさせむ―無理を押してもうしばらくと申し上げて引き留めることもできない。○ふりはへ、とはせ給ふみ心ざしはさる物にて―雪が降っているのにわざわざお訪ねになる志は言うまでもないが。「ふりはへ」は雪が「降り」を掛ける。○みちの程もおぼつかなし―雪の降る帰り道も心配だ。○ずぎよばすれば―従者を呼び寄せると。

(十一)〈宴席での喫煙〉

さかつきいだして、のみかはすをりなどは、ろんなう、けをされにたるやうなれど、めぐりくるも、まどほきひまには、なほしもはたえあらぬぞかし。下戸はさらなりや。

【語釈】

○ろんなう、けをされにたるやうなれど―タバコはもちろん酒の勢いに負けているようではあるけれども。○めぐりくるも、まどほきひまには―盃がめぐってくるのも間延びして。○えあらぬぞかし―タバコのほうが良い。○下戸はさらなりや―下戸であれば、なおさらタバコのほうが良い。

(十二)〈タバコ入れのいろいろ〉

かの、わすれおきて、いなむとしたりし物よ。をりくの心ばへ、時につけつゝ、しいづるたくみ、年々月々に、めづらしう見えしらがへば、いたりすくなきわか人などは、いとこのましうしつゝ、ふりぬさきにと、いそぎもとめて、ほこ

らしげに、もてありくを、人もはやうもたりけるこそ、くちをしけれ。大かた、かやうの事、人にあらそひ、うけぱりたるは、いとおさなき、わざならめ。めでたしと、こひて見たるに、したりがほしたるも、にくし。又あまり、きすくにて、いつも、ふるめかしきかたをのみ、まもりゐたるも、折にふれ、所によりては、さはいへど、はへなきわざなり。只なにとなく、おいらかに、なつかしう、きよげなるを、あるにまかせて、もたまほし。さりとして、ひたぶるにえんだち、なまめきたるも、女などはさもあらめ、いとをこがましく見ゆるぞかし。かうやうのすき／＼しさも、わかき程は、つみゆるしつべし。さだすぎたる人の、ようせずは、むまごもいだきつべきころほひなるが、いまめきはなやぐこそ、あひなき物なれ。

【語釈】

○かの、わすれおきて、いなむとしたりし物―タバコ入れ。○見えしらがへば―目立つようにするので。「つねに見えしらがひありく」（枕草子・職の御曹司におはします頃）。○いたりすくなきわか人―思慮の浅い若人。○ふりぬさきにと―流行遅れになる前にと。○人にあらそひ、うけぱりたる―人と争つてわがもの顔に振る舞う。○めでたしと、こひて見たるに、したりがほしたるも、にくし―すばらしいと言つて所望して見る時、得意顔をしているのは憎らしい。○あまり、きすくにて―あまりにも生真面目で。○いつも、ふるめかしきかたをのみ、まもりゐたるも―いつも古めかしいタバコ入ればかりを大切にしているのも。○はへなきわざなり―さえないことである。○おいらかに、なつかしう、きよげなるを―鷹揚に好ましくござつぱりとしたものを。○ひたぶるにえんだち、なまめきたるも、女などはさもあらめ―ひたすら妖艶で美しいタバコ入れも、女が持つのであれば、それはそれで良いけれども。○かうやうのすき／＼しさも―このように物好きな趣向も。○わかき程は、つみゆるしつべし―若いうちはきつと許されるにちがいない。○さだすぎたる人―盛りを過ぎた人。○ようせずは―悪くすると。○いまめきはなやぐこそ、あひなき物なれ―当世風で華やかなのは不釣り合い

だ。

(十三)〈タバコは老後の友〉

いふかひなく、年まかりいり侍りては、何事につけても、をのづから人に心をおかれ、さるから、うちいでむとおぼしき事此ヨリ老人ノ人ニ語ル詞也も、つゝ、ましく、又おのづから、ひがくしき心も、いでまうでくるわざに侍れば、おのづから所せきものになりゆき、うたてのおきなやと、うちあはめはれ、まじらひふればふ人も、ありがたき世にこそ此マデ老人ノ詞也など、かたりつゝ、きせるかきのごひ、みがきなどしつゝ、のみるは、わか、りしより、たがひに、心かはらぬ友ならめと、見つゝ、心ぐるしく聞ゆるわかうどさへ、えあらず。まして、ひとりつれづれに、あかしくらすらん、おひ人の、身をさらぬ友としたるは、ことばりにこそ。相思思ふと、もろこし人の名づけ、むも、げにさることぞかし。

【語釈】

○いふかひなく、年まかりいり侍りては―不甲斐なくも年を取ってしまったてからは。○をのづから人に心をおかれ―自然と他の人に氣を使つてしまつて。○うちいでむとおぼしき事も、つゝ、ましく―口にしようと思つたこともつい言わないで済まし。○ひがくしき心―人をひがむ気持ち。○おのづから所せきものになりゆき―自然と窮屈な気持ちになつていき。○うたてのおきなやと、うちあはめはれ―厄介な老人だとさげすまれ。○まじらひふればふ人―交流し、関わり合いを持つ人。「ことさらにも、かの御あたりになればはせむに、なか覺えの劣らむ」(源氏物語・行幸)。○きせるかきのごひ、みがきなどしつゝ、のみる―煙管の汚れを拭き取り、磨きなどしてばかりいる。○えあらず―並一通りではない。○ひとりつれづれに、あかしくらすらん、おひ人―独りで暇を持てあまして生活するような老人。○身をさらぬ友としたるは、ことわりにこそ―タバコを肌身離さぬ友としたことは道理である。○相思ふ―たばこの異名を相思草という。

「相思草、淡婆姑」（和漢三才図会）。○もろこし人―清沈穆。「煙艸一名相思艸、言人食之則時々思想不能離也」（『本草洞詮』第九）。「本居宣長隨筆」第五卷「群書摘抄」に当該箇所の抜書がある。また、「李白ガ詩二、相思如烟草、歴乱無冬春トイヘリ。相思草ト名ルハコレヨリ出ルニヤ。又偶符合スルカ。李ガ詩ハ本ヨリ烟ト草トノ事也」と続けて記している。

（十四）〈秋の景色とタバコ〉

世ばなれ、物すごき、み山のおくにも、すめば、年月をかさねて、すむ物の、花もみぢうつればかはる、折ふしのさびしさを、いかゞはせむ。秋のゆふべ、霧にしをる、槿の下露をながめ、夜ふかく、松のみの、ほろ／＼と落るを、ねられぬみ、にきゝゐたらんほどなどのつれ／＼は、へ金炉烟霽エンライのすこしきなるにのみぞ、なぐさめてまし。何となく、はかなげにをよびにすへて、めぐらしゐたるも、さびしげにみゆ。あはれ、源氏の君の、須磨の御うつろひのほど、御つれ／＼なりし世にも、かゝる物ありてましかばと覚ゆ。

【語釈】

○世ばなれ、物すごき、み山のおく―俗世間から離れ、ひどく物寂しい深山の奥。○すめば、年月をかさねて、すむ物―住めば都の諺のように、慣れれば長く住むことができる。○花もみぢうつればかはる、折ふしのさびしさ―花や紅葉が散ると変わる折々の寂しさ。「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」（新古今集・秋下・三六三・藤原定家）。○霧にしをる、槿の下露―霧に濡れしおれた真木から滴り落ちる露。「さびしさはみ山の秋の朝ぐもり霧にしをる槿の下露」（新古今集・秋下・四九二・後鳥羽天皇）。○松のみの、ほろ／＼と落る―松の実がぼろぼろと落ちる。「ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかるもいと冷やかに」（源氏物語・橋姫）。○へ金炉烟霽―金の香炉から出る霽の

ような煙。高価な煙草の贅沢な喫みかた。「金炉烟靄微、銀釵殘影灰」(長孫佐輔「幽思」)。○何となく、はかなげにをよびにすへて、めぐらしゐたる―何となくはかなげにタバコを指にはさんで回している。○源氏の君の、須磨の御うつろひ―源氏物語・須磨巻で、光源氏が都を離れ、一人須磨の地で流離の生活を強いられたこと。○御つれづれなりし世―手持ち無沙汰であつた時期。「須磨には、年返りて日長くつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲き初めて、空のけしきうららかなるに、よろづのことと思し出でられて、うち泣きたまふ折多かり」(源氏物語・須磨)。○かゝる物ありてましかば―タバコがあつたならば、どんなにか充実した生活を送ることができたであろうに。

(十五) (煙管を用いた即興演奏)

はなやかに、今やううたひ、いとなつかしうひきすましたる、物のねに、きゝゐる人も、おのづから時どき声うちそへ、かたはしつゝしりうたひつゝけうじたる、きゝしらぬあたりも、きせるして、しどけなく、ひやうしとりゐたる。さうづゝしからぬわざなりや。

【語釈】

○今やう―今様。中世初期に流行した、七・五調四句からなる歌謡。○いとなつかしうひきすましたる、物のね―たいそう心惹かれるように弾いている楽器の音。○つゝしりうたひつゝ―ぽつりぽつりと口ずさみながら。「懷なりける笛取り出でて吹き鳴らし、「蔭もよし」などつづしり歌ふほどに」(源氏物語・帚木)。○きゝしらぬあたりも―曲を聴いたことがない人も。○きせるして、しどけなく、ひやうしとりゐたる―煙管を使って不調法に拍子を取っている。○さうづゝしからぬわざ―物足りなくない合奏。

（十六）〈後朝とタバコ〉

ふたよ三夜、よがれしとこの、うらみもちりも、まだつもるとはなけれど、大ぬさのひくてや、よそになどかこちつづくる言のはをあはれと聞つゝつるのよるせを、かたらひなぐさめなどしつゝ、かたみにぬらす、袖のうらにも、たくものけふりはたつるとなん。枕より外にもらさぬ、むつ物がたりも、此人はきゝあかすらん。鐘の音も、曉ちかく、つげわたせど、つきぬ契りは、猶有明の、つれなき空にとゞめおきて、立別むとする程、妻戸、おしあけつゝ、詠めいだして、とみにもいでやらず、へあしたの霜のと、打ちずじ、衣うちをはをり、ひもさしなどする程、女もなほあかぬさまにて、海士のもしほ火、またたきそめ、をよびして、けしきばかり、かいのごひ、こゝろありげに、さしよせたる、にくからで、とりつゝ、吹いづるけふりに、入かたの月かげ、さともりたるは、いひしらず、哀にえんなる、明がたのけしきなりしかや。又人めをつゝみ、色にもいでゝ、わりなき恋をするがなるふじの煙の、くゆりわび、空にきえなむ、思ひの程をも、かゝるたよりに、人づてならで、さながら、ほのめかし出るわざも、ありとかや。

【語釈】

○ふたよ三夜、よがれしとこの、うらみもちりも、まだつもるとはなけれど——二晩三晩男の通い婚が途絶えた床の恨みも塵も、まだ積もるといふわけではないけれども。「ひと夜とて夜離れし床のさむしろにやがても塵のつもりぬるかな」（千載集・恋四・八八〇・讃岐）。○大ぬさのひくてや、よそに——大祓の大幣のように引く手はほかの人なのか。「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどこそ頼まざりけれ」（古今集・恋四・七〇六・読人不知）。○かこちつづくる言のは——恨み言を言い続ける和歌。○つるのよるせ——最後に寄りつく瀬。「大幣と名にこそ立てれ流れてもつひに寄る瀬はありといふものを」（古今集・恋四・七〇七・在原業平）。○かたみにぬらす、袖のうら——お互いに涙を流して濡らす袖の裏地。「うら」は「浦」を掛けて「末の松山」の縁語。「契りきなかたみに袖をしばりつつ末の松山波越さじとは」（後拾遺集・恋

四・七七〇・清原元輔、百人一首。○たくものけふり―藻塩を焼く煙。「五月雨はたく藻のけふりうちしめり潮たれまさる須磨の浦人」(千載集・夏・一八三・藤原俊成)。○枕より外にもらさぬ、むつ物がたり―枕以外には外に洩らすことのない寝物語。「枕よりまた知る人もなき恋を涙せきあへずもらしつるかな」(古今集・恋三・六七〇・平貞文)。○鐘の音も、曉ちかく、つげわたせど―明け六つの鐘が夜明けを知らせるけれども。○つきぬ契り―名残の尽きない約束。○有明の、つれなき空―有明の月が平気で掛かっている空。「有明のつれなく見えし別れより曉ばかりうきものはなし」(古今集・恋三・六二五・壬生忠岑、百人一首)。○へあしたの霜のと、打ちずじ―朝の露が置くように、起きて出て行くのなら、と朗詠し。「君に今朝あしたの霜のおきていなば恋しきことに消えやわたらむ」(古今集仮名序)。○海士のもしほ火、またたきそめ―海士が藻塩を焼く火を焚き始めて。「なびかじな海士の藻塩火焚き初めて煙は空にくゆりわぶとも」(新古今集・恋二・一〇八二・藤原定家)。○をよびして、けしきばかり、かいのごひ―指でほんの少しだけ拭き取り。○入かたの月かげ、さともりたるは―西に沈む月の光がタバコの煙でさつと曇っているのは。「床の上に、夜深き空も見ゆ。入り方の月影すぐく見ゆるに「ただ是れ西に行くなり」と、独りごちたまひて」(源氏物語・須磨)。○人めをつ、み―人目を避けて。「人目をば包むと思ふに堰きかねて袖にあまるは涙なりけり」(千載集・恋一・六九七・藤原宗家)。○色にもいで―心の内を表に出すこともなく。「忍ぶれどいろに出でにけりわが恋は物や思ふと人の問ふまで」(拾遺集・恋一・六二二・平兼盛、百人一首)。○わりなき恋をするがなるふじの煙―道理に合わない恋をするに、駿河にある富士山の煙を掛ける。「心をぞわりなきものと思ひぬる見るものからや恋しかるべき」(古今集・恋四・六八五・清原深養父)。「人知れぬ思ひをつねにするがなる富士の山こそわが身なりけれ」(古今集・恋一・五三四・読人不知)。○煙の、くゆりわび―煙がくすぶり、燃えかねて。「なびかじな海士の藻塩火焚き初めて煙は空にくゆりわぶとも」(新古今集・恋二・一〇八二・藤原定家)。○空にきえなむ、思ひの程―空に消えてしまうような思い。「風になびく富士の煙の空に消え

て行方も知らぬわが思ひかな」（新古今・雑・一六一五・西行）。○人づてならで―他人を介してではなく、直接に。「今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならで言ふよしもがな」（後拾遺集・恋・七五〇・藤原道雅、百人一首）。

（十七）〈女性の喫煙、赤子とタバコ〉

女は大かた、すかざらんが、まさりてぞみゆる。なよびよしめくかたには、たよりともなりぬべけれど、さるからいとゞ、おもにくきかたもそふかし。されど、今はおしなへての事になりぬれば、もちひざるは、中々さうゞし。

二三ばかりなるちごの、みならひて、ちいさき手、さしのべ、まさぐりつゝ、口にさしいれたる、あやうしとて、とらんとするを、むつかりすまひたる、いとうつくし。

【語釈】

○すかざらんが、まさりてぞみゆる―タバコが好きでないほうがよく見える。○なよびよしめくかたには、たよりともなりぬべけれど―しなやかに風流にふるまうためには、より所になるかもしれないけれども。「あまりいたくなよびよしめく程に、重きかたおかれて、すこし軽びたるおぼえや進みにたらむ」（源氏物語・若菜上）。○さるからいとゞ、おもにくきかたもそふ―それゆえにいつそう顔を見るだけで憎らしい面も加わる。「なか必ずしもおもにくく引き入りたらむが賢からむ」（紫式部日記）。○おしなへての事―ありきたりのこと。○もちひざるは、中々さうゞし―タバコを扱わないのはかえって興ざめである。○ちいさき手、さしのべ、まさぐりつゝ―小さい手を差し伸ばしてもあそびながら。○口にさしいれたる―タバコを口に差し込んだ。○あやうしとて、とらんとするを―タバコは危険だといって取りあげようとするのを。○むつかりすまひたる、いとうつくし―嫌がつて抵抗している様子はとてもかわい。この段落は『枕草子』「うつくしきもの」を下敷きに模倣するか。

(十八)〈タバコの煙の雅やかな見立て、タバコの煙の秘技、タバコの害〉

鼻よりふとけふりのたちいでたるを、炭がまのやうに覚えしといひし、さは其人のかほや、雪のやうにありけむと、いとゆかし。

わにせむとて、人の吹いでたる煙の、おかしくまどかにて、いくつも、つらなりあがるを見て、我もなじかはあやまたむ。いとようしてむ。見給へなど、あらがひつゝ、吹いだしたるに、あやしうみだれぬる、心うがりて、此たびは、いかでと、いたう口つきつくろひ、心したるが、又吹そこなひたる、いとむとく也。これをや、けふりくらべと、いふべからん。わがけふりに、人のむせびて、かほあかめ、しはぶきしきりにしたる、いと心ぐるし。

すてたるに、なほ立のぼる煙は、みな人の、いとふわざなり。やにとかいふ物の、口にいりきて、ひたいにしはよせたるもおかし。ゑひて、かしらいたくしたるも、又おかし。

【語釈】

○炭がま―木を焼いて木炭をつくるのに使う釜。「さびしさは冬こそまさされ大原や焼く炭竈の煙のみして」(堀河百首・一〇八二・藤原顕忠)。○雪のやうにありけむ―顔の白さは雪のようであつたろうか。「日数経る雪げにまさる炭竈の煙もさむし大原の里」(新古今集・冬・六九〇・式子内親王)。○わにせむとて―タバコの煙で輪を作ろうとして。○我もなじかはあやまたむ―私もどうして失敗するものか。○此たびは、いかで―今回は何とか輪を作りたい。○いとむとく也―たいそうみすばらしいことだ。○けふりくらべ―タバコの煙で造形を比べあうこと。もとは「立ち添ひて消えやしなまし憂きことを思ひ乱るる煙くらべに」(源氏物語・柏木)により、思ひの深さを比べることをいうが、これをタバコの煙の比較に見立てた諧謔。○わがけふり―火のついたタバコの先から立ちのぼる煙。副流煙。○むせびて、かほあかめ、しはぶき

しきりにしたる―息を詰まらせ、顔を赤くしてしきりに咳き込んでいる。○すてたるに、なほ立のぼる煙―捨てられた吸い殻から立ち上る煙。○やに―タバコの燃焼によつて生じる褐色の粘液。○ひたいにしはよせたる―苦さのために苦悶する表情。○あひて、かしらいたくしたる―飲酒の時に喫煙をして頭痛になる。

（十九）〈北野天満宮参詣の折の出来事〉

思ふどち^{フタリミタリ}二人三人、るいして、北野へまうでたるに、いつも、人多くまいりたる、まして廿五日などは、おまへわたり、ところせく立こみて、ちかづくべくもあらぬに、からうじて、御はしをのほり、かうらのほとり、かたはらより、おがみ奉る。こゝらの人、おのがさまぐ、何事をいのらむ。いと久しくふしおがみ、ぬかづきあるも有。かればみたる声して、なにがしそくさいのためなど、けいするもほの聞ゆ。ことぐしき、かしは手のひゞきには、あら人がみのかしこき御耳を、おどろかし奉るらんと、いとたのもし。手さしのべ、十二とうの心ざしとて、奉りたる、敬白^{ケイヒョク}のかた、うちならずも、いとなく聞ゆ。おくのかたを見れたれば、御札^{ミフダクワシユン}巻数など、宮僧^{クヅ}ばらの、とりいで、さづくる、いたゞきて、まかづるもあり。すこしこなたさまには、うちさうぞきて、はらひもなにと、しのびやかにみたる、法師は、だらになどゆるらかに、ねんずるもたうとし。みあらかのうしろのかたより、いそがはしげに、めぐりきて、みはしのもとにて、かたばかりおがみつゝ、又はしりゆくは、もゝたびまうでとかや。さるは手に数さしゆくも中にみゆ。南の御門^{ミカド}をいでゝ、あそここゝ、物みありき、下さま^{シモ}まへゆくに、寺どもおほくならびたてるまへを過るに、かたはらより、やせさらほひて、いみじきさましたる、かたるの、つとよりきて、あが君ぐ、たばこすこしといひたるぞ、いとこちたき。いひをだに思ふさまにはくはざめるものゝ、これ^モをしか、あながちにこふことぞ、よにあやしき。かへりもみで、ゆくに、猶けしきとりつゝ、かゝづらひくるを、うしろより、ずぎ^{ツギ}のせいする、聞もいれず。すこしえさせたるに、になうよろこば

ひて、いぬるぞ、いとあはれなるや。

【語釈】

○北野―北野天満宮。菅原道真を天神として祀る。○廿五日―道真の誕生日（六月二十五日）と命日（二月二十五日）に因んで、毎月二十五日を式日とする。○おまへわたり、ところせく立こみて―境内のあたりは大勢の人が押し寄せて混雑して。○からうじて、御はしをのほり―やつとのことで橋を登り。○かうらのほとり、かたはらより、おがみ奉る―高欄のあたりで傍らから拝礼申し上げる。○ぬかづきあるも有―額を土に擦り付けて祈る者もいる。○ことゝしき、かしは手のひゞき―大げさな拍手の響き。○あら人がみ―今上天皇。○十二とうの心ざし―十二文の賽銭。○敬白のかた、うちならず―経文の一部だけを読み、鐘を鳴らすこと。「啓白の鐘」ともいう。○御札―仏の加護を願う護符。○卷数―僧が願主の依頼に応じて読誦した経文や陀羅尼の題名や度数を記したもの。○宮僧ばら―北野天満宮の神宮寺の僧侶たち。○うちさうぞきて―きちんとした装束を着て。○だらに―陀羅尼。○みあらか―御殿。○みはし―階段。○もゝたびまうで―神仏に祈願するために同一の杜寺に百度参拝すること。○寺どもおほくならびたてるまへ―東向観音寺などが多く軒を連ねている。○やせさらほひて、いみじきさましたる、かたゐ―痩せてみすほらしく、ひどい格好をした乞食。○あが君―あなた様。物乞いの言葉。○いひをだに思ふさまにはくはぎめるものゝ、これをしか、あながちにこふことぞ、よにあやしき―米さえ思うように食べることができないような者が、タバコをそのように執拗に欲しがることは本当に不思議である。○けしきとりつゝ、かゝづらひくる―こちらの機嫌をうかがいながら付きまといて来る。○ずぎのせいする、聞もいれず―従者が制止するのも聞き入れず。○になうよろこぼひて、いぬるぞ、いとあはれなるや―これ以上ないくらい喜んで去っていったのはたいそう感慨深いことだ。

（二十）〈折々の風情とタバコ〉

月の前、花のものは、さらにもいはず。すべて折々のけうあるふぜい、めづらしき浦山の、けしきえならぬなどを、みるにも、思ひいでて、とりあへず、折からのおかしきをも、そふる物にこそ。

【語釈】

○月の前、花のものと一月の光が射すところや花の咲いている木の下。○すべて折々のけうあるふぜい——総じて四季折々の情趣ある趣。○浦山の、けしきえならぬなどを、みるにも——海辺の山の並一通りではない景勝などを見るにつけても。○思ひいでて、とりあへず——タバコのことを思い出して取り出すこともできず。○折からのおかしきをも、そふる物にこそ——その折にあつた情趣を添えるものである。

（二十一）〈樵夫のタバコ休憩、タバコの色々〉

あやしの山がつどもの、つま木おひたるが、あまたかいつらねて、家路をいそぐ。そはづたひ、かたなりなるわらはべなども、程につけつゝ、になひつゞけたるぞおかしき。すこしたひらなる所にて、木ども、しばし杖にあづけおき、まろかれあひて、打やすみたる、てけの事天気などいひつゝ、例のけふりは、おのがじゝたつめれど、かうやうのものゝは、にほひなども、中々うるさければ、かゝず。たかきいやしき、ほどくにつけつゝ、もちあるきざみく有て、国々ところくゝに、なだゝるたぐひおほく、おのづからその品かはり、はた匂ひよりはじめて、色ことに、あちはひ同じ物ならず。よきはよく、あしきはあしくて、いとようけぢめ分るゝものなり。

【語釈】

○あやしの山がつども——下賤な樵夫。「あやしのしづ山がつのしわざも、言ひ出でつればおもしろく」（徒然草・十四

段)。○つま木―薪にするための小枝。○かたなりなるわらはべ―まだ幼い子ども。○まろかれあひて、打やすみたる―丸くなって休んでいる。○てけの事―天気のこと。「てけのこと、楯取りの心に任せつ」(土佐日記・一月九日)。○かうやうのもの、は、にほひなども、中々うるさければ、かゝず―このような下賤な者が喫むタバコは、匂いなどもかえつて煩わしいので書かない。○たかきいやしき、ほど―につけつ、―身分の高い者も低い者もその身分に応じて。○もちあるきざみ―有て―用いる刻みタバコには区別があつて。「きざみ」は刻みタバコと身分の掛詞。○なだゝるたぐひ―評判の高い品物。○いとようけぢめ分るゝものなり―本当に違いが分かれるものである。

(二十二)〈タバコ屋の看板〉

旅人の行かふ道などには、所々に、きざみたばこなどゝ、いと大きに、あしでのかきそこなはれたるやうに、しやうじなどにかき、あるは、物のゑやうなど、おかしげに、あやしうかきなしたるを、見つゝ行は、めさむる心ちす。

【語釈】

○きざみたばこ―葉タバコを細かく刻んで、キセルに詰めて喫むもの。○あしで―字を絵画風にくずした仮名書体。○しやうじ―障子。○物のゑやうなど、おかしげに―細工物の絵図面など趣深げに。○あやしうかきなしたる―ことさらにみずばらしく描いてある。○めさむる心ちす―目がさめるような新鮮な気持ちとする。「しばし旅だちたるこそめさむる心地すれ」(徒然草・十五段)。

(二十三)〈農夫や大工等の喫煙〉

春の末つかた、野べに打いでゝ、田のを見しかば、しづのおがたがへしやすみて、道のべに、しりさしすへ、こしよ

りきせるとうで、あつごえたるたばこいれより、ひねりいだし、こちくしう、おしつぎて、く、みつ、かしらかたふけて、火うちひらめかし、口つきおかしげに、のみゐたる。はては、火けたじとて、手のうちにたきあけて、あつければ、まろばしながら、又かいつぎたるこそ、いそがはしく見えし。又木の道のたくみ、さらぬよろづのなりはひにも、身をつとめこうじにたる、しばしやすまむとは、かの一服を、したまちつ、こもと、しはて、など、たのしみはげむめり。大かた、朝夕のさへたえくなる屋にも、猶此けふりはたつるぞかし。

【語釈】

○しづのおがたがへしやすみて―農夫が田を耕すのを休んで。○あつごえたるたばこいれより、ひねりいだし―厚ぼったいタバコ入れから刻みタバコをつまんで出し。○こちくしう、おしつぎて、く、みつ、―仰々しく刻みタバコを補填して口に含まながら。○まろばしながら―燃えかすを転がしながら。○木の道のたくみ―大工。○身をつとめこうじにたる―仕事に従事し、疲れている。○朝夕のさへたえくなる屋―朝夕の食事や食わずの家。○此けふりはたつるぞかし―タバコの煙は立っているよ。「高き屋に登りて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」（新古今集・賀・七〇七・仁徳天皇）。

（二十四）〈外出時の喫煙の作法〉

いづくにもあれ、出たるに、わすれて、もてこざりし、くちをしさよ。又粉のやうに成たるにも、すべて、人にもとむれば、ひげしつ、あたへたる、きせるかりなど、すべて、なめげなること、人に物こふことなどは、大かたつ、ましくて、せぬわざなるを、是のみ何とおもはず、ならひになりぬるも、いかなるにか。きえぬる、すてむとて、さしよせたるに、人もおなじさまにして、はどうつきあひたる、かたみにゆづりあひて、まちたる。かしこまりある所などにては、

まづともいふかし。火つくるをりなどは、さてまつ程も、久しくさへ覚ゆ。

【語釈】

○出たるに、わすれて、もてこざりし、くちをしさよ―外出した折にタバコを持ってくるのを忘れた時の悔しさよ。○ひげしつ、―へりくだりながら。○すべて、なめげなること―総じて礼を失すること。○大かたつ、ましくて、せぬわざなるを―普通は遠慮してしないことであるが。○かしこまりある所―居住まいを正す場所。○火つくるをり―火打ちで火を点ける間。

（二十五）〈少年の喫煙、火の不始末による不祥事〉

人につかはるるわらははの、まだゆるされぬ程、わりなくこのみて、使の道など、しる人のがり、かくろへつ、立よりては、こよなうおそかりしと、いちはやくいはる、物から、とみの事いひにやりたる折なども、なほこりずまの、あまのもしほ火、けふりのたえまを、うらさびしとぞおほひためる。

露ばかりのすひがらより、火いできて、おほくの屋ども、やけうするためしも、あなれば、ふかく此火のこと、せいするも、ことはりぞかし。それはさることにて、つねに衣などやきたぐらし、あるはた、みに落して、しらざるを、人に見つけおしへられて、あはてふためき、ひろひすてたる。かたはらいたく、すゑろにおかし。

【語釈】

○人につかはるるわらははの、まだゆるされぬ程―使用人の少年で、まだタバコを喫むことが許されない年齢で。○わりなくこのみて―タバコを偏愛して。○使の道など、しる人のがり、かくろへつ、―お使いの途次、知人の許に隠れては。○とみの事いひにやりたる折―火急の報せを遣わす時。○こりずまの、あまのもしほ火―懲りずに点けたタバコの煙。「こ

りずまの浦のみるめゆかしきを塩焼くあまやいかと思はむ」（源氏物語・須磨）。○けふりのたえまを、うらさびしとおぼひためる―煙が絶える間を寂しいと思つているように見える。「うらさびし」の「うら」は「浦」を掛け、「須磨」の縁語。「君まさで煙絶えにし塩釜のうらさびしくも見え渡るかな」（古今集・哀傷・八五二・紀貫之）。○露ばかりのすひがら―ほんの少しの吸い殻。○此火のこと、せいする―タバコの火の始末を厳しく決める。○それはさることにて―それは当然のこととして。○やきたぐらし―焼きただれて。○かたはらいたく、すぐろにおかし―氣恥ずかしく軽率でばかしい。

（二十六）〈タバコの調度品の清掃と手入れ、持ち主の心根〉

朝まだき霜、よのなごりいと寒けくて、大かた、かしらさしいづべくもあらぬに、さゞやかなるわらはべの、らうたげにうちしほみて、けふりの調度^{テウド}もちいでつゝ、かきはらひ、きたなき物きよむるとて、氷うちたたき、水そゞぎ、かた手ふきく、石にすりて、がはくといひたる、音さへ、哀にきこゆ。

おほかた此てうどのもてなしにも、あるじの心のおしはかるゝ也。いつもちりばみけがれて、ひいれのはい、きたなげに、きせるあかつき、とゞこほりがちなるは、にくゝさへぞある。きらゝかにみがきなして、きよげなるは、一きは、のむ心ちもよし。かゝりとて、あまり心をいれて、ちりもゐさせじと、もてあがめたるも、是のみにや、暮すらんと、心づきなし。火のいくたびもきえたる、いとむつかし。はいふきこほしたる、あさましさは、えもいはず。

【語釈】

○朝まだき霜、よのなごり―朝早く昨晚の霜の余波で。○かしらさしいづべくもあらぬに―外に頭を出すこともできないので。「頭さし出づべくもあらぬ空の乱れに、出で立ち参る人もなし」（源氏物語・明石）。○さゞやかなるわらはべの、

らうたげにうちしほみて―小柄な子どもがかわいらしく腰を落として。○けふりの調度―煙草の調度品。○きたなき物きよむる―よごれたものをきれいにする。○氷うちたたき、水そ、ぎ―煙管の手入れをする手順を詳細に記している。○てうどのもてなし―タバコの調度品の手入れ。○あるじの心のおしはからる、也―持ち主の心の奥が推測される。○きせるあかつき、とゞこほりがちなる―煙管に垢が付着し、通りが悪くなる。○かゝりとて―だからといって。○ちりもゐさせじ―塵を据えるようなこともするまい。「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹と我が寝る常夏の花」(古今集・夏・一六七・凡河内躬恒)。○もてあがめたるも―寵愛するもの。○是のみにや、暮すらんと、心づきなし―タバコのためにだけ生活しているのだろうかと好きになれない。○いとむつかしい―たいそううつとうしい。○はいふきこぼしたる、あさましさは、えもいはず―灰が吹きこぼれた見苦しさは何とも言えない。

(二十七)〈タバコへの限らない愛執〉

かくのみ、いみじういひなすを、いみきはむ人は、それしかあらじ、やうなき物也と、思ひすてなむも、ことはり哉。つくぐとたどりつ、思へば、げにはかなくあだなる物にこそとも、思ひかへさる。もろこしにても、とりぐとことはりて、さだめかねたるとかや。いむことたゞしき、ほうしな^ンどの、ちかくさしよせだにせぬも、いとたうとし。かく迄は、思ひとけ共、なほおきがたき物にや、あしたにおきたるにも、まして、物くひたるにも、ぬるとても、大かたはなる、折こそなけれ。かう、つねにけちかく、したしき物は、なにかはある。さるを、いみじき願^{ガワシ}たて、ものいみなどして、七日、もしくは十日など、たちぬたらんほどにぞ、つねは、さしも思はぬ此君の、一日もなくて^{ヒトヒ}は、えあられぬことをばしるらんかし。

【語釈】

○かくのみ、いみじういひなす―このようにタバコを称賛する。○げにはかなくあだなる物にこそとも、思ひかへさる―なるほど虚しく無駄なものと返す返すも思われる。○もろこしにても、とりぐにことはりて、さだめかねたとかや―中国でも種々様々に議論して決めかねているとか。典拠未詳。○いむこと―穢れを遠ざけること。○なほおきがたき物にや―やはり放っておけないものなのであるうか。○あしたにおきたるにも、まして、物くひたるにも、ぬるとても―朝起きた時にも、まして食後にも、寝る時にも。○けちかく、したしき物―身近で昵懇の物。○たちゐたらんほど―禁煙している間。○此君―タバコ。限らない愛執が見える。

（二十八）〔識語〕

癸酉仲秋 神風伊勢意須比飯高本居健蔵草

安永四年 乙未仲春 長谷川常雄写

〔付箋〕尾花かもとを書著し給へるは翁二十四の御とし宝暦三年癸酉之仲秋なり。このとし通称健蔵と改めつ。

【語釈】

○癸酉仲秋―宝暦三年（一七五三）八月。宣長二十四歳。○神風伊勢―「神風」は「伊勢」の枕詞。○意須比飯高―「意須比」は「飯高」の枕詞。「倭姫命世記に、意須比飯高国とあるは、食器に物を盛を、余曾布とも意曾布とも云、その言にて、意曾比たる飯高しと云意の、枕詞なれば、此とは異なり。されど言の意は、本は一におつめり。此意須比を儀式帳には、忍とあるは、比字の後に脱たるなるべし。強てよまば、忍一字をもオスビと訓べし」（『古事記伝』卷十二）。○乙未仲春―安永四年（一七七五）二月。○長谷川常雄―宣長の門弟。宝暦七年（一七五七）―文化八年（一八一二）。通称新二郎、また武右衛門。実は、豪商中里新三郎の長男。安永元年（一七七二）十六歳の時に『普笠日記』の旅に同行す

る。安永二年（一七七三）以前に入門する（『授業門人姓名録』）。安永四年（一七七五）は常雄、十九歳。なお、常雄は「格別出精厚志」（寛政五年十一月九日付千家俊信宛宣長書簡）三十二名にも名を連ねる。

【注】

- (1) 『本居宣長稿本全集』第一輯（博文館、大正十一年）所収。
- (2) 『本居宣長全集』第十六卷（筑摩書房、昭和四十九年）以下、宣長の文は同全集による。
- (3) 伊藤東涯『秉燭譚』は『日本随筆大成』一一一（吉川弘文館、昭和五十年）に収録される。
- (4) 『在京日記』宝暦六年十一月十七日条。
- (5) 拙著『本居宣長の大東亜戦争』（ベリかん社、平成二十一年）および『国学史再考―のぞきからくり本居宣長』（新典社、平成二十四年）参照。
- (6) 拙著『村田春海の研究』（汲古書院、平成十二年）参照。
- (7) 杉田昌彦『宣長の源氏学』（新典社、平成二十三年）参照。

【付記】 本稿は、公益財団法人たばこ総合研究センター二〇一九年度研究助成課題「愛煙家本居宣長の原点『おもひ草』の研究」による研究成果である。翻刻の許可をいただいた皇學館大学附属図書館にお礼申し上げます。また、書誌文献調査の許可をいただいた各所蔵先にお礼申し上げます。

ancient and contemporary times] or the *Genji monogatari* [Tale of Genji], and while the text was written in the classical style of elegant ancient Japanese literature, when depicting the tobacco itself, he described it using colloquial expressions from the early modern period. Above all, we should note that the colloquial writing style he used at this time would be used by him in his later discussions and articles, and we can surmise that the acquisition of the versatile colloquial style was an important precursor for his activities as a scholar of national learning (*kokugaku*).

keywords : Motoori Norinaga *Omoigusa* (*Obanagamoto*) textual research
textual annotation *Goyouin Bunkozohon* at Kogakkan University

Research on Motoori Norinaga's *Omoigusa*

Koji Tanaka

Abstract

Among specialists, the fact that Motoori Norinaga was a tobacco lover is well-known. Tobacco was his constant companion from his 20s, when he went to Kyoto for medical training, until the final years of his life. As a scholar, Norinaga not only smoked tobacco, but he absorbed knowledge of it from Chinese books, and he recorded this in the form of notes. When he was 24, out of his deep affection for tobacco, he composed a work of literary jottings (*zuihitsu*) called *Omoigusa* [Grasses of meditation] (also known as *Obanagamoto* [Sources of Japanese pampas grasses]).

This paper on *Omoigusa* presents the results of an investigation of extant sources, and through textual criticism and revisions of the content, it aims to provide annotations to the text. First, the results of an investigation of each version has shown that, as a rule, manuscripts carried the title of *Obanagamoto* and printed versions were titled as *Omoigusa*. Second, the content of the original text has been found to have been best retained in the manuscript versions, and this essay has concluded that it is therefore appropriate to treat the *Obanagamoto* text held at Kogakkan University in the Goyouin Collection as a source text. Third, the process of annotating this text has revealed that Norinaga had already acquired in his 20s most of his skill with written Japanese expressions from purely Japanese passages, and this paper establishes that he was able to freely use this skill to compose various kinds of sentences. In describing scenes or depicting emotion, he drew on the literary classics such as the *Kokin wakashu* [Collected poems of